

組紐・組物学会 ニュースレター

The Kumihimo Society Newsletter



Volume

1

Number

1

2010年8月25日

組紐・組物学会行事（終了分）

2010年4月24日（土）	12:00～13:00	設立準備委員会
	13:30～13:45	組紐・組物学会設立総会
	14:00～15:30	特別講演会「戦国武将の魂 - 甲冑を修復する」 寺本 靖
2010年6月11日（金）	10:00～16:00	第1回ワークショップ「丸台の組紐とアンデスの組紐」
2010年6月12日（土）	9:00～12:10	本学会共催 京都工芸繊維大学公開講座「組紐の歴史」多田牧子
2010年8月27日（金）	10:00～16:00	第2回ワークショップ「丸台の組紐」組紐検定5級対応等

目次 Contents

2 戦国武将の魂 - 甲冑を修復する

組紐・組物学会設立総会の特別講演会の内容から抜粋。

寺本 靖

4 組紐の歴史 帯締めはいつから組紐になったのか

京都工芸繊維大学公開講座「組紐の歴史」から帯締めの歴史を抜粋。多田牧子

6 組紐・組物学会行事予定

7 組紐・組物関連情報

8 組紐・組物学会のご案内

In this issue

Restoration of Samurai Armor - The Spirit of Feudal Warloads

by Yasushi Teramoto

When was Obijime made with Kumihimo?

by Makiko Tada

Forthcoming Kumihimo events in and outside of The Kumihimo Society

組紐・組物学会ニュースレター

第1巻第1号 2010年8月25日発行

編集・発行 組紐・組物学会事務局 京都工芸繊維大学大学院

伝統みらい教育研究センター 仲井研究室内 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎御所海道町

TEL/ FAX: (075)724-7844 E-mail: inoda@kit.ac.jp

本印刷物と同じ内容は学会の Web でもご覧になれます。 <http://www.kumihimo-society.org>



戦国武将の魂 - 甲冑を修復する

Yasushi Teramoto
寺本 靖



▲ 図2 修復前の紫系威童具足の胴

大量に必要となった。濃く染め上がった紫色の絹糸は、組紐研究家の多田牧子氏に依頼し、より実物に近づけるため試作を繰り返し、平打ち、丸唐、四つ組の組紐を製作して頂いた。

修復に使用する手織りのビロードは、イタリアのフィレンツェの伝統織物の工房などから見本など取り寄せてみたが、使用されている絹の質が悪く困っていた。その折、中国の蘇州シルク博物館の復元室で古い機織り機を使用してビロードを織っていると聞き、早速に蘇州に赴いた。そこで織られていたビロードは、上質の絹糸を使用していたが毛足が長かったので、改めて修理用の短い毛足のビロードを織ってくれるよう注文した。いかなる物が出来てくるのか、いささか心配だったが3ヶ月後、蘇州シルク博物館から無事ビロードが届き修復を進めることが出来た。

鎧の襟部分には紫に染められたビロードが使用され、また鎧の胴の裏部分前面には黒染のビロードが貼られていたので、紫染のビロードは組紐同様に紫根で染め、黒色部分のビロードは、藍染めしてから揚を使用し染め上げそれぞれ修復した。結局、約一年半をかけて修復が完成した。

この二領の華やかな紫系威の鎧を着用した毛利吉就は、15歳で家督を継いだが次第に藩の政治が悪化し、元禄7年に25歳の若さで急死したそうである。

私は、甲冑武具研究家の山岸素夫先生に長年にわたり同行させて頂き、全国の寺社、博物館、大名家、個人コレクションの国宝や重要文化財を含む甲冑武具の調査をする機会に恵まれた。実物を手に取り詳細な作りを把握し、風合いを肌で感じるからこそ、物の本質を知る貴重な勉強であることを先生との調査で痛感した。

文化財の修復においては、化学染料や樹脂などの化学物質を使用した修理が見受けられる。明治時代、日本美術院の監修の元、東京の御岳神社の赤系威大鎧や厳島神社の黒系威大鎧などの甲冑が修復された。当時最先端のドイツ製の化学染料などが使用され、直後は旧来の組紐と同じ色合いだったようであるが、現在は甚だしく退色してしまっている。

それらの調査を通して得た私の修復における指針は、その甲冑が製作された当時に使用された技法や素材を可能な限り再現するよう常に心掛けということである。そうすることにより、修理部分を本来の風合いにより近く復元でき、修復品により優しい修復が出来ると思っている。そのような修理方針のもと、私が修復したいいくつかの甲冑をご紹介させて頂く。

毛利家三代藩主、毛利吉就所用、紫系威童具足

1995年に岩国の岩国歴史美術館において甲冑武具の展覧会が開催されることになった。毛利家歴代の宝物を所蔵する毛利博物館より三代藩主、毛利吉就所用の紫系威二枚胴具足が出品される事になった。この甲冑は、元禄時代の工芸の粋を集めた素晴らしい大名鎧である(図1)。

前もって図録を製作するために写真撮影が行われたが、立ち合われた岩国美術館の柏原伸二館長が、美術館の展示品ではなく、自宅に所蔵されている子供用の小さな鎧が、この三代藩主の甲冑と作域がそっくりだと言われた。早速に柏原館長のご自宅に伺い拝見すると、確かに濃く染められた紫の平打ちの組紐で全体を装飾し、金具、染革など細部に至るまでよく似た作域で、毛利博物館所蔵の鎧をほとんど縮小した様な作りに大変驚いた。それもそのはずで、収納していた鎧櫃の蓋を開けたところ、蓋裏に三代藩主毛利吉就が天和2年8月に、疱瘡から快復した事を感謝し神社に奉納した事がしたためられていた。

奉納されてから永らく箱の中にしまわれていたので、特に紫の組紐やビロード部分が甚だしく破損しており、これを期に修復することとなった。修復にあたっては、柏原館長から当時により近い素材を使用し修理するようにとのご依頼があった。

紫の組紐の復元作業は、まず愛媛県野村町の絹の研究所の協力を得、何種類かの古種の蚕から繭を飼育し、座繰り作業により糸を製作した。何種類か製作した絹糸の中から、より風合いが近い糸に撚りをかけ組紐用の糸を製作した。次に、古法により紫草の根から紫の色素を抽出し紫染を施した。紫根は奈良時代の正倉院の染織品にも使用された染料である。

まず紫草の根を、ぬるま湯に漬けて石臼で搗き、麻袋に入れもみながら色素を抽出し、次に明礬を少量希釈した溶液で媒染剤を作り、交互に漬けて染色して行く。

濃く染めるには、高価な紫草の根が



▲ 図1 紫系威童具足

毛利家三代藩主毛利吉就所用
岩国美術館 + 柏原コレクション
所蔵



講演終了後、京都工芸繊維大学内の美術工芸資料館所蔵の鎧を見学し、寺本氏に解説をして頂きました。



図4 手紙

修復中の佩楯（上図）から発見された甲冑師宛の手紙

能島村上水軍棟梁、村上家伝来の甲冑

戦国時代、瀬戸内海に勢力を誇った能島の村上水軍棟梁、村上武吉はその絶大な勢力を豊臣秀吉に睨まれ、本拠地大島から追放になった。その後九州などを転々とし、江戸時代に山口県屋代島で毛利家の御船手組となった。

2000年4月、36代当主の故村上公一氏が所蔵する資料の調査に、大島の宮窪町教育委員会の方が蔵内調査に訪れた。大方の調査を終え、最後に残った木箱を開けたところ、厚く積もった埃の中から何分割された甲冑の残欠が出てきた。

あまりにも破損が甚だしく、汚れていたが、改めて調べてみると室町時代中期の黒革威胴丸と室町時代後期色々威腹巻で、どちらも袖や兜は欠損するものの守護大名クラスが使用した室町時代の甲冑であることが判明した。またこれ以外にも同時代の甲冑の付属品なども発見されている。これら室町時代の二領の甲冑と付属品は、江戸時代の防長古器考という本に、村上家伝来品として記載されている貴重な資料である。

これらは、故村上公一氏から寄贈され、新たに作られる村上水軍博物館に展示されることになったが、破損の激しさから、今後展示をするにも大破した鎧を平面に並べて展示する以外展示方法は無いと思っていた。しかし宮窪町教育委員会の方々から、これら二領の甲冑をぜひ立体に展示したいとの強いご希望があり、なんとかその熱意にお応えするため修理方法を検討した。

二領の甲冑は、肩の部分が両方とも欠損しており、黒革威胴丸は、背中部分が全体の三分の一ほど失われていたので、これらの部分を新たに製作し取付ける必要があった。しかし、修復は



図3 村上家伝来の甲冑

室町時代中後期のもので、修復後は村上水軍博物館に展示中。

出来るだけ手を加えず最小限度に控え、新たに取付けた部分もいつでも分解可能なようにする、という修理方針で進められる事となった。

この修復は室町時代の技術への挑戦であり、養蚕、製糸、糸撚り、草木染、染革、彫金、鍛金、組紐などの職方・研究家の方々に参加して頂く事になった。組紐は、座繰りで上げた絹糸を草木染めし、組紐研究家の多田牧子氏とご門下の方々の協力を得て、古法によるクテ打と言う組台を使用しない組技法組で亀甲打ちなどの組紐を復元する事が出来た。約一年半をかけ、この大破した二領も色々な方々のご協力で修復する事が出来た。

これらの修復された村上家伝来の甲冑は、かつて居城のあった大島に建てられた村上水軍博物館に展示されている。村上家が豊臣秀吉に追放されてから、実に400年ぶりに里帰りしたことになる。

軍学者、野口是斉考案の甲冑

1995年、フランス人の日本甲冑のコレクターが、自分のコレクションである江戸時代中期に製作された珍しい甲冑に関するある論文を甲冑武具の研究誌に発表した。その甲冑には天狗の面形式の朱塗りの鉄製の面が装着されているが、これは江戸時代の兵法家、松宮観山が書いた甲冑の図譜、名甲図録に記載されている鳥居播州侯に仕えた軍学者、野口是斉考案の甲冑面と特徴が類似しているとの内容であった。その後同じ形式の具足をロンドンとニューヨークのオークションで入手し、現在では三領の同様の形式の甲冑を所蔵しているとのことである。名甲図録には、ただ野口是斉考案の甲冑面の簡単な図だけが掲載され、三田上源重に申

しつけ製作したと書かれてある。

この三領の甲冑には、共通したいくつかの特徴が確認できる。兜鉢に早乙女家の製作したものが使用されていること、胴の正面中央部分の蓋が開き、懐のものを陣中で出し入れできるようになっていること、籠手部分に血留の塗り薬を収納できるケースがついているなどである。しかし、早乙女家の兜鉢を使用している事と、甲冑面だけが江戸時代の図譜に類似している事だけでは、野口是斉考案の甲冑と言い切るには実証的ではない、と思っていたところ、2003年、同様の天狗形式の朱塗りの甲冑面が付属した甲冑の修理を知人から依頼されたのである。やはり、早乙女家の製作した兜鉢を使用し、胴は前が開閉する事ができ、籠手には薬を収納できるようになっていた。驚いたのは胴の裏側に、軍学者野口是斉が甲冑の製作を申し付けたと言う、三田上源重の署名が書かれてあった事である。署名には、武州江戸住三田上源重高吉、元禄8年12月吉日と書かれており、この甲冑が軍学者、野口是斉の考案したものである事が判明した。

このような資料的にも貴重な野口是斉考案の甲冑と出会うのは、この一領のみと思っていたが、2009年の暮れ、あるコレクターの方がこの野口是斉考案の形式の甲冑を買い求め、修復を依頼して来た。

兜鉢、甲冑面の形式や胴や籠手の作りも同様のものではあった。またもや驚いたことには、胴裏に武州江戸三田上源高吉作之、元禄2年2月吉日と署名されていたことである。さらにこの甲冑の膝前を覆う佩楯という部分を修復していたところ、染革を貼った部分の中から、和紙を折りたたんだ芯が出てきた。開いてみるとそれは三田上源重に宛てて書かれた手紙であった事には大変驚かされた。修復の仕事をしていると、珍しい甲冑との出会いや不思議な発見があるものである。

寺本靖氏略歴

甲冑師・五反田豊正氏、加藤博氏の門弟として11年の修行の後、平成2年に独立。その後も染織を京都の染師で染織研究家・四代目吉岡常雄氏、五代目吉岡幸雄氏に師事。また漆芸や彫金など各分野の専門家に教えを受ける。さらに甲冑武具研究家・山岸素夫氏の門下となり、平成11年イタリア、イギリス、フランスの博物館に収蔵されている日本甲冑武具を調査、平成13年、京都祇園祭山鉾連合会の依頼により、応仁の乱から伝来した京都祇園祭の宝物の調査に山岸素夫氏と共に参加する。同年に浄明山町保存会所蔵の重要文化財「黒革肩白威胴丸」と橋弁慶保存会所蔵の重要文化財「黒革肩白威胴丸」、保昌山保存会所蔵の足利將軍家より拝領といわれた胴丸残欠（火中品）などを調査。平成14年に京都祇園祭・保昌山保存会所蔵ご神体着用着の紅糸威二枚胴具足（江戸時代）喉輪（室町時代）および太刀拵（室町時代）打刀拵（桃山時代）の修復をする。これまでに修復品は、防府毛利報公会、毛利博物館に所蔵されている毛利秀就所用「黒糸威具足」、岩国歴史美術館所蔵「江戸中期の毛利本家当主、毛利吉就が幼少時着用した紫糸威二枚胴具足」、防府毛利報公会・毛利博物館所蔵「江戸中期の若殿所用小桜威重具足」、防府毛利報公会毛利博物館に所蔵「最後の藩主・毛利敬親所用 紺糸威五枚胴具足」、伊達文化保存会「宇和島伊達家三代藩主の紺糸威二枚胴具足」など多数。組紐・組物学会理事、文化財漆協会、日本漆工史学会、日本甲冑武具研究保存会会員、祇園祭山鉾連合会調査員



組紐の歴史

帯締めはいつから組紐になったのか



Makiko Tada
多田牧子

私が組紐をしていますと申し上げますと、ああ、帯締めですか？と良く言われます。現在では帯締めと言えは組紐、組紐と言えは帯締めと認識されていますが、帯締めの歴史は江戸末期からであり、組紐の帯締めの隆盛は明治後期からです。では帯の歴史と重ねて見て行きましょう。

応仁の乱（1467）頃までは、上流階級の正式の服装としての帯は、ほとんど認められません。応仁の乱後は上流階級も庶民も袴をつけなくなり、打掛けの下に小袖と細い带状のもの（以下、帯と言う）となります。この頃には男子も小袖をつけるようになり、男女ともにそのような帯をつけるようになりました。

岩佐又兵衛（1578-1650）が描いた松浦屏風（国宝「婦女遊楽図屏風」大和文華館所蔵）の女性は小袖を着

て細い帯を締めています。組紐の帯も見られます。この組紐の帯は名護屋帯とよばれ、桃山時代から江戸初期にかけて流行したものです。豊臣秀吉の朝鮮出兵のおり、遠征の根拠地であった肥前名護屋（佐賀県東松浦郡鎮西町）からの帰還兵士は土産物としてこの組紐の帯を在所に持ち帰り、そしてそれが流行ったことからこの名前がよばれるようになったと伝えられています。朝鮮の組紐の技術が伝わったとの説もあります。色糸を用い、丸紐に組んだもので、長さは1丈2尺（約4m）ほど、両端にたっぷりとした長い房が付いています。文禄から寛永（1592-1644）の頃に流行し、宝暦（1751-1764）頃まで用いられたもので、腰に3～5回巻き、後ろや左右の脇で両輪奈に結び垂らしました。おしやれの最先端を行く遊女たちが盛んに用いたとされ、細見美術館所蔵の「男女遊楽図屏風」、MOA美術館所蔵の「湯女図」（重要文化財、17世紀初め、岩佐又兵衛）などに、この名護屋帯を結んだ姿が見られます。

時代が進むとともに帯幅が少しずつ広がって行きました。広い幅の帯をいち早く締めはじめたのはやはり遊女で、寛永（1624-1643年）の頃には5寸（15cm）ほどの幅の帯を用いていました。一般の婦女子の帯幅が広がったのは、寛文（1661-1627）元禄（1688-1703）の頃です。菱川師宣（1618-1694）の「見返り美人」は吉弥結び（きちやむすび）にしています。吉弥結びとは延宝から元禄の頃に流行した女帯の結び方で、後ろで片輪奈（かたわな）に結びます。延宝（1673-1680）に舞台上で人気を博した女形の初代上村吉弥が考案したものと言われています。吉弥結びが登場するまで、女帯のお

およその規格は幅2寸（6cm）長さ6尺5寸（2m）でした。

上村吉弥は広幅で1丈2尺という長さの帯に重りを縫い付け、結び目の両端を唐犬の耳のようにだらりと垂らした新型の帯結びを考案したのです。吉弥の帯結びを真似たい女性達の要求にすばやく応えた京都の帯屋は大変な利益を得たとのことです。

しだいに幅広となっていった帯は、元禄時代になると9寸（約27cm）近い幅のものも用いられるようになりました。結ぶ場所も、前、横、後ろなど自由に結んでいましたが、しだいに未婚者は後に、既婚者は前に結ぶようになりました。享保以後（1716-1735）は9寸幅、1丈2尺の長さが基準となりました。

このように、帯の中はどんどん広くなり、帯だけでは腰に保持するのが難しくなり、着崩れを防ぐため、帯の上に結ぶ紐が出現します。帯の上に結ぶ紐を最初に用いたのは、歌舞伎役者・瀬川菊之丞（中村路考）で、彼が創始した「路考結び（矢の字結び）」に使われたのが最初との説と、文化14年（1817）亀井戸天神の太鼓橋の渡り初めに深川の芸者衆がお太鼓結び（現在のお太鼓結びの原型）をした時というのが通説となっています。

服飾研究家、遠藤武（「近世帯留考」考古学雑誌、28(4)、PP. 266-276、1938）によりますと、我衣鈔11巻に「文化10年（1813）の頃よりして腰帯を帯の上へめて」との記述があるとのことで、この頃には帯締め状のものがあったと推察できます。帯留（止）という言葉の初出は文政5年（1822年）ということです。最初は帯を結び留めるものということで帯留とよばれていたかもしれませんが。または男の旅装束の一つとして

図1 帯締めの出現
柳亭種彦（1783-1842）國貞（1786-1865）





帯の上に締める「上（うわ）じめ」があったとのことですから「上じめ」とよばれたかもしれません。そして帯がほどけないようにと固定した紐類の中に、真田紐や刀の下げ緒もあったとのこと。実際、五渡亭国貞（1786-1865）「奉納提灯見立田島屋なつ」は丸組のおびじめを諸輪奈結びにしています。しかし、一般には鼠祠通夜譚（ねづみほこらつやもの）がたり、柳亭種彦作 1783-1842、国貞画 1786-1865）の表紙（図1）に見られるように、紐というより「しごき」のような物が多かったと考えられます。「しごき」はおはしよりをするのに用います。享保の頃は、ほとんどの女性はおひきずりをしていましたので、出かけるときは丈を短くするためにこの「しごき」を用いていました。ですから身近に「しごき」様のものはあったわけです。ちなみにきものは掛け布団代わりにも用いたので儉約令のときもおひきずりは禁止されませんでした。国貞の七小町見立雨乞ひでは絞りのしごき状の布を帯の上に諸輪奈結びにしています（図2）。以下、ここではこのように帯の上に結ぶ紐を帯締めとします。

為永春水（1790-1844）作、国貞（歌川豊国）画の北雪美談時代加々見（ほくせつびだんじだいかがみ）44編上の表紙絵では赤い丸紬紐で、片輪奈結びにしています（図3）。明治14年の豊原国周（1835-1900）筆の役者絵では、帯締めは赤い丸紬紐で、

図2 布の帯締め

五渡亭国貞（1786-1865）

諸輪奈結びにしています。役者絵ですからそれ以前の服飾を描いたとも考えられます。

豊原国周筆の潤色 36 花撰の部分図（図4）では、刀の下げ緒を使い帯締めに見受けられます。そして刀の部品である目抜きをあしらって、帯留めとしているようです。目貫は元々は刀身と柄を留める目釘の頭を飾る金具でしたが、後に目釘と目貫というように別になりました。

月岡 芳年（つきおかよしとし、1839-1892）が明治時代に描いた絵「東京自慢十二ヶ月十一月酉のまち日本橋小三」の帯締めは、組紐のように見受けられ、帯の中央に帯留めの金具がついています。また、長崎大学附属図書館幕末明治期日本古写真データベースによりますと明治3（1870）～4年に撮られた「上野彦馬と家族」の写真では右端の女性が帯締めをしているのがわかります。これは刀の下げ緒状のもので、組紐の帯締めと考えられます。ただし現在の帯締めの装着方法とは違い紐の両端を帯締めに挟み込んでいません。

明治9年（1876）の廃刀令により、組紐の最大の用途であった刀関係の需要がなくなってしまいました。組紐職人達は、これによりたちまち失職しますが、窮余の策として、その技術を帯締めや羽織紐に活かすこ



とにより時代の波を乗り越えました。日清戦争の頃（1894）には房の付いた組物による帯締めが登場し、大変に斬新だったため人気をよんだとされています。これより少し前、男物の羽織紐に房のない「無双」とよばれる組物が生まれていました。

明治も後期になると組紐の帯締めの需要がさらに増し、広く用いられるようになります。明治の後半から昭和10年くらいまでは、明治政府の殖産興業策や数度の戦捷景気も手伝い経済は上向き、組紐は増々需要を高めていきました。そして徐々に現在のように組紐が帯締めとして認識されるに至ったと考えます。

きものは「結び」という任意性、融通性に富む留め方で形づくられています。季節、気候に合わせ、あるいは、着て行く場所、個人の好みに応じてきつくもゆるくも自由に着ることができます。「紐」や「結び」に対する精神的な意味のほかに、それらがもつ融通性が日本人の生活風土にとっても馴染みがよかったため、それらはわが国独特の発展をしてきたと考えられます。組紐は縄文時代からありますが、その中で「組紐の帯締めの歴史は意外に短い」と言うことがおわかりになると思います。

図4 刀の下げ緒を使った帯締め

豊原国周（1835-1900）

図3 丸紬紐の帯締め

為永春水（1790-1844）作、歌川国貞（歌川豊国）作画

東京講演会

9月25日(土)

日本女子大新泉山館 2F 会議室

11:00～12:30 寺本靖

「戦国武将の魂 - 甲冑を修復する」

13:30～15:00 多田牧子

「日本服飾史と組紐」

15:00～16:00 ワークショップ

「組紐ディスクで組む」

講演会参加費：組紐・組物学会会員は無料、一般 1000 円

ワークショップ参加費：組紐・組物学会会員は材料実費(500～1000 円)のみ。

一般 3000 円(材料費別)

ワークショップ

■第3回 2010 年 10 月 15 日(金)

10:00～16:00

京都工芸繊維大学 総合研究棟 4 階多目的室

「クテ打組紐技法入門」定員 20 名

講師：木下雅子

日本の組紐の古法、徒手で紐が組めるクテ打技法の最も基本になる組み方、指操作法による 3 種の組紐の組み方を習得します。

クテ打組紐は、古代日本で用いられその後大きく発展して日本の組紐の基礎を築いた技法です。永年忘れ去られていたこの技法の最も古い形である指操作法は、技法伝承者が数人見出されて復元されました。その歴史的意味からクテ打の基礎を組紐技術者の必須知識の一つとして組紐・組物学会では検定試験に加えています。

従ってこの講習会では、組み方だけでなく、手順と組成組織の関係、色柄と組織の関係などを理解する方向に進みます。さらに時間



が許せばその手法から展開できる方向を探ります。

持参するもの：はさみ、25x5 cm の厚紙板、他筆記道具等

参加費：会員無料、非会員 3000 円
材料費+テキスト：2500 円

■第4回 2010 年 12 月 10 日(金)

10:00～16:00

京都工芸繊維大学 総合研究棟 4 階多目的室

「丸台の組紐」組紐検定 4 級対応。
「アンデスの組紐」蛇の背文の平組サンプルを作ります。

講師：多田牧子

16 玉の基礎的な組紐を制作し、手の動かし方、組の状態や仕上げの質の向上を図ります。

丸台レンタルご希望の方は 20 名までお貸しできます(お申込順)
丸台レンタル料(重り玉、吊り重り含む)：会員 1000 円、非会員 2000 円

持参するもの：はさみ、目玉クリップ 2 個、箸 1 本、30 cm x 40 cm 位の段ボールの板

参加費：会員無料、非会員 3000 円

■第5回 2011 年 2 月 11 日(金)

10:00～16:00

京都工芸繊維大学 総合研究棟 4 階多目的室

「アンデスの平組」定員 40 名

講師：多田牧子

雷文、翼文の平組サンプルを作ります。

持参するもの：はさみ、目玉クリップ 2 個、箸 1 本、30 cm x 40 cm 位の段ボールの板

参加費：会員無料、非会員 3000 円

組紐・組物検定試験

組物検定は、組物を社会に広め、組物技術の向上と発展、技術指導者の育成を目的として、組紐・組物学会にて 2010 年度より設けられた検定試験です。性別・年齢・学歴等の制限はなく、またどの級

からも受験することができますが、本年度は 4・5 級試験のみ行います。試験は、京都で行い、各級とも筆記と実技の試験が行われます。筆記試験は 4・5 級 同じものを実施し、獲得点数により判定致します。検定基準となる各級の技術到達度は以下のとおりです。

■5級：丸台と角台の 8 玉、16 玉。

組物の基礎的な技能と知識があるか。

■4級：丸台 16 玉、24 玉。

組物について専門的スキルと知識があるか。

■3級：クテ打初級、綾竹台初級。組物について専門的スキルと知識を持ち、丸台で創作組紐を作るなど、応用能力があるか。

■2級：クテ打中級、綾竹台、高台 1 枚物など。

組物について専門的スキルと知識を持ち、指導者の補佐ができるか。

■1級：クテ打上級、高台 2 枚物の綾書ができる。唐組台の実技。

組物について高度な専門的スキルと知識を持ち指導する実力があるか。

【試験日】

筆記試験：2010 年 12 月 11 日(土) 13 時から

実技試験：2010 年 12 月 12 日(日) 午前 9 時から 12 時まで、または午後 1 時から 4 時まで

実技試験時間やご持参いただくものは受験票と一緒に送付致します。

【願書申し込み受付期間】

2010 年 10 月 18 日(土曜日) 当日消印有効。

受験希望者は受験申請書に必要項目をご記入の上、下記までお申し込み下さい。

【受験料+絹糸】7350 円の予定

【試験会場(予定)】

京都工芸繊維大学総合研究棟

【申込み方法】

検定試験申込書に、郵便番号・住所・氏名・電話番号をご記入の上、郵送にて事務局までご請求下さい。ご自分の宛名を書き、80 円切手を貼った封筒を同封してください。

シンポジウム講演募集

2011年4月23日(土)

京都工芸繊維大学

主催：組紐・組物学会および京都工芸繊維大学 伝統みらい教育センター (共催)

日程(予定)： 4月23日(土)
シンポジウム、展示会、バンケット (懇親会)

講演募集：

第一回組紐・組物シンポジウムでは、組紐・組物に造詣の深い研究者による基調講演に加えて、一般からの組紐・組物に関するあらゆる分野の口頭発表を広く募集しております。本学会を活発な議論の場、有意義な情報交換の場に、組紐・組物の普及と地位向上のための礎とするべく、多くの方々からの講演並びに参加をお待ちしております。また、学会後の懇親会では、組紐・組物の分野、用途を超えた情報ネットワークの拡大の場として利用していただければと期待しております。

講演形式は、口頭発表です。一件あたり20分(質疑応答を含む)を予定しておりますが、申し込み講演件数により、変更する場合がございます。講演を希望される方は、添付の様式をご利用いただくか、下記のメールアドレス宛に必要事項をご記入の上、お送りください。講演申込締切：

2010年12月20日(月)

参加費：会員3,000円、一般8,000円、学生は無料(バンケット費は含みません)

実行委員会：(委員長) 上田隆久
(委員) 魚住忠司、大谷章夫、渡辺一生

展示会

2011年4月23日(土)

シンポジウムと同時に、会員の皆様の組紐作品の展示会が企画されています。応募要項などは後日発表します。



第2回組紐国際会議 Braids 2012 Manchester

世界中の組紐作家、研究者が集う組紐国際会議は、第一回が2007年に京都で開催され大変好評だったことはご存じの通りです。その第2回は英国のThe Braid Societyが主催し、5年の準備を経て2012年にマンチェスターで開催される予定です。ロンドン・オリンピック終了の直後、8月19日～25日が組紐国際会議です。

マンチェスターはご存じのように産業革命を背景に、綿織物産業で発展した英国第2の都市です。都心には古い建物とモダンな建物が同居し、会場となるManchester Metropolitan University (MMU) のGeoffrey Manton会館も市内にあります。The Braid Societyでは参加の仮登録も兼ね、会議プログラムへのアンケートを行っています。 <http://www.braidsociety.com/braids2012/forms/B2012F001.html> 第1回組紐国際会議の公式資料集「Space Time and Braid」(カラー148頁)は残部があります。ご希望の方は出版元(books@texteco.jp)にお問い合わせ下さい。



会場となるMMUのGeoffrey Manton会館

木下雅子氏のループ 組紐講習会

埼玉県和光市で、3日講習会2回、4日講習会1回、合計10回講習会として、ループ指操作技法の主要な組み方の全てを概観するコースが予定されています。希望のコースだけを選択できる「つまみ食い」コースも設けられます。また、組紐・組物学会の10月15日の組紐ワークショップで行うクテ打組紐入門に続く講習会も計画されています。

■奈良1日講習会

ループ指操作法によるささなみ組と唐組の組み方

期日：10月30日(土)

場所：国際奈良学セミナーハウス
奈良市登大路町63

詳細は下記にてご確認ください。

http://www.lmbric.net/MKHP/mk_workshop_files/10koshukaianai_web.htm

問合せ先：Masako Kinoshita, 5
Winthrop Place, Ithaca, NY, 14850
USA

Tel/fax: +1 (607)257-0886

E-mail: mkinoshi@twcny.rr.com

(8/28まで)

351-0106 埼玉県和光市広沢2-1

理化学研究所国際交流会館B-102

Tel.: 047-462-4785

E-mail: masabraider@gmail.com

(9月1日以後)

ごあいさつ

我が国には、縄文時代に始まる世界に誇れる組紐・組物の伝統文化があります。また、組紐・組物は伝統文化であるのみならず、その技術が高性能繊維強化複合材料に活かされるなど、最先端の技術と結びついて新たな発展を遂げ、工業分野でも大きな役割を担っております。

京都工芸繊維大学では、2005年4月、伝統みらい研究センターが教育研究プロジェクトの一つとして設立されました。その目的は「伝統に内在された知恵を使って新たなものづくりを創成し、日本のみらいを切り拓く」ということであります。その活動は2005年10月に開催した組紐展「日本とアンデスの組紐展」に端を発し、その中で行ったワークショップが好評を博し以来現在までの5年間、年6回の組紐1日ワークショップを続けてきました。一方、日本の組紐のすばらしさは世界各国にも浸透し、英

語圏を中心に作家、研究者が増え国際会議の気運も高まり、2007年11月には第一回の組紐国際会議を日本で開催するまでになりました。

組紐は力学的な合理性に優れた構造を持っていることから複合材料の補強材としても注目を集めています。そこで組紐の多様な構造の研究も不可欠となってきました。すなわち、組紐を伝統技術の習得・伝承に留めることなく、広く歴史的・文化的・芸術的な、さらには工学的な側面にも着目し、理論的な枠組みで捉える必要ができました。

組紐・組物学会はこれらの状況の上に立ち、組紐・組物学の確立と発展に寄与し、組紐・組物の普及と地位向上を目的に設立されました。本会は、会員の研究発表、知識の交換ならびに会員相互間および内外関連学協会との連絡・提携の場となり、組紐・組物に関連ある学理とその応用と進歩普及をはかり、もって、学術・文化の発展に寄与することを目指しています。

会長 多田牧子

入会案内

組紐・組物学会へ入会を希望される方は、必要事項（日付、氏名、ふりがな、生年月日、性別、連絡先の住所・電話番号、電子メール、会費支払い方法、ニュースレターの郵送を希望するかどうか）をご記入の上、学会事務局宛での電子メール、ファックスまたは学会ホームページからお申込み下さい。

年会費は正会員4000円、学生会員1500円、法人会員30000円で、入会金は不要です。送金には銀行振込みまたは現金書留をご利用下さい。講演会・講習会等にご参加の際に、受付で入会申込みと同時に支払い頂いても結構です。

正会員には紹介会員を必要としません。学生会員はできるだけ在学先教員をご紹介会員として下さい。

振込先：みずほ銀行 出町支店
口座：普通 No.1146170
名義：組紐・組物学会



組紐・組物学会事務局

京都工芸繊維大学大学院
伝統みらい教育研究センター
仲井研究室内
〒606-8585
京都市左京区松ヶ崎御所海道町
Tel/Fax: (075)724-7844
E-mail: inoda@kit.ac.jp
<http://www.kumihimo-society.org>
ご入会、ワークショップ、組紐検定のお申し込みはこちらにお願いします。

組紐・組物学会ニュースレター
1巻1号（年2回発行）

役員

■会長
多田牧子：組紐研究者
■副会長
仲井朝美：京都工芸繊維大学
■理事
上田隆久：日本ビラー（株）
魚住忠司：村田機械（株）
大谷章夫：（独）宇宙航空研究開発機構
木下雅子：クテ打組紐技法研究会々長
倉谷泰成：（株）カドコーポレーション
國分光弘：（株）コクブンリミテッド
品川雅明：新日本石油（株）
多田眞作：（株）テキスト
寺本 靖：（有）寺本文化財工芸社
廣澤浩一：三重県組紐協同組合顧問
圓井 良：圓井繊維機械（株）
三浦弥生：組紐研究者
渡辺一生：渡敬（株）

事務局

猪田宮子：京都工芸繊維大学

法人会員

有限会社組紐工房 廣澤徳三郎
株式会社カドコーポレーション
株式会社島精機製作所
株式会社テキスト
渡敬株式会社

